

福島県環境影響評価審査会議事概要

1 日 時

平成24年3月27日(火) 午前10時00分開会 午前11時43分閉会

2 場 所

福島県庁本庁舎2階 第1特別委員会室

3 議 事

- (1) 会津若松ウィンドファーム(仮称)事業環境影響評価準備書に対する知事意見について
- (2) (仮称)沢又山高原風力発電事業環境影響評価方法書に対する知事意見について
- (3) 福島県特定環境影響評価実施要綱(案)について
- (4) 福島県環境影響評価条例附則第6項に定める復興事業及び復興関連事業に係る環境影響評価の運用方針について(案)

4 出席者等

- (1) 福島県環境影響評価審査会委員 7名
- (2) 事務局 4名
- (3) 傍聴者 15名

5 議事概要(「(仮称)沢又山高原風力発電事業環境影響評価方法書に対する知事意見について」の該当部分のみ記載)

【事務局】

資料に基づき「(仮称)沢又山高原風力発電事業環境影響評価方法書に対する知事意見」について説明。

【委員】

資料3-1の14ページ51番、白色閃光灯関係の事業者の見解は、2009年3月の文献を参考に書いているが、環境省のバードストライクの手引きは、2011年1月に出ている。そこでは、最新の文献を引用しており、赤色灯でも間隔をおいて、短く点灯するのであれば、それが最も今のところ安全だと書いてある。ここは、白色のストロボの方が鳥を引きつけることが少ないという2009年3月の文献を引用しているが、この白色ストロボが鳥を引きつけないというのは、例えばビルディングとか、高いタワーに付けてある白色ストロボのことだと思う。それは、鳥が飛んできて、それに当たるといことはそれほど多くないが、ただ、アメリカの例では、ガラス窓があれば一般的にどんな鳥でも、年間1億羽から10億羽はビルディングに当たって死んでいる訳であるから、そういうことは普通にある。白色ストロボで、風車に

今度は寄って来ると、風車のブレードが回転している時に、フラッシュでストロボが当たると、風車のブレードが止まって見えるのが非常に危ない。そのことを書いてない文献を引用していると思うので、もう一度検討していただきたいと願います。

【事務局】

知事意見の中にも、最新の知見を基に解析評価して準備書に記載と書いているので、今の意見についても、事業者に伝え、最新の文献により解析評価するようにということとする。

【委員】

よろしく願います。

【議長】

今の51番の事業者見解のところは古い文献で、最新の文献によることとすることに修正してください。

【事務局】

知事意見としては、最新の知見を基にしておりますので、事業者に対しては、2011年1月の文献、その後時間の経過等あって、最新の文献、知見が出てくれば、そういったものも踏まえて、解析評価するようにということとする。

【議長】

アメリカではビルに当たって死ぬ鳥が1億から10億羽もいるのか。

【委員】

どんなテキストにも書いてある。アメリカで、例えば今から10年くらい前、全国で1万台風車があった時期、風車に当たる平均羽数は、年間2.7羽。だから、アメリカで当時風車に当たってた野鳥は、推定で2万7千羽。それに対してビルディングは1億羽から10億羽が当たっている。人間が作る文明の利器というのは、必ず野鳥とぶつかるが、後は程度の問題。何が最適の戦略か、やっぱり、みんなで考えなければいけない。

【議長】

日本ではどのくらい当たって死んでいるのか。

【委員】

統計が無い。環境省の手引きに載っているが、私が観察しているところで、小鳥が一晩5羽くらい当たった例がある。それは、ガスが出た夜で、雨が降って、ストロボではないが、投光器を一晩中照らしていたから迷った鳥が集まってきてぶつかってしまったというもの。

日本で、今250万キロワット（の出力）なので、平均千キロワットの風車で2,500台あるとして、仮に5羽、年間例えば多くて10羽当たるとして、25,000

0羽年間日本で当たっていると、そんなオーダーである。

【議長】

普通の人たち、あまりビルに当たる確率と風車に当たる確率なんて知らないですね。

【委員】

知らないですね。でも、そのバードストライクに関心のある方の文献には、必ずその表（アメリカにおける鳥類の推定衝突数）が出ている。だから、国際的に有名な表です。

【議長】

それでは、最新の情報を基にしてということ、それでフォーマットいただければと思う。